

留学生を対象とした日本語指導の現状と課題

国際関係学科 宮谷 敦美

本報告では、2013年度の外国語科目としての「日本語」の開講状況、および留学生への日本語指導と学修指導をめぐる課題について述べる。

1. 2013年度開講日本語科目

外国語科目の「日本語」は、主として学部留学生を対象とするものと、海外学術交流協定大学の特別聴講学生(以下、交換留学生)を対象とするものに分類される。2013年度、学部対象科目は通年5コマ、交換留学生対象科目は通年6コマ、半期1コマを開講した。概要は、表1のとおりである。

[表1 2013年度留学生対象日本語科目一覧]

科目名	開講	対象	レベル	担当者	内容
日本語Ⅰa	月1限	学部1年	上級	服部亜衣子※	パラグラフ・ライティング
日本語Ⅰa	木2限	学部1年	上級	中道一世※	大学生活に必要な口頭表現能力養成
日本語Ⅱa	月2限	学部2年	上級	服部亜衣子※	論文・レポート作成
日本語Ⅱa	木1限	学部2年	上級	中道一世※	アカデミック場面での口頭表現能力養成
日本語Ⅲa	木3限	学部3～4年	上級	黒野敦子※	読解と要約技術
日本語Ⅰb	月4限	交換	初～中級	山口和代※	トピック語彙
日本語Ⅰc	火3限	交換	中～中上級	加藤淳※	アカデミック・ライティング基礎
日本語Ⅱb	木2限	交換	初～中級	米勢治子※	ディスカッション・作文
日本語Ⅱc	月2限	交換	中～中上級	馬場典子※	速読
日本語Ⅲb	火5限	交換	初～中級	加藤淳※	プロジェクトワーク
日本語Ⅲc	金2限	交換	中～中上級	荻谷太佳子※	テーマに基づくディスカッション
日本語Ⅲc (後期のみ)	水2限	交換	初中級～ 中上級	宮谷敦美	日本人学生との交流をもとにしたプロジェクトワーク

※印は非常勤講師

2. 授業内容および教室活動について

2.1. 学部留学生対象日本語科目

学部留学生を対象とする科目では、1年次に大学での生活全般に必要な日本語能力と学修に必要な書きことばの基礎力を身につけること、2年次にレポート作成、発表・討論技術を養成することを目的とし、3～4年次は卒論も見据え、要約などの練習も取り入れた授業構成にしている。授業では、情報リテラシーに関する内容や文章を学生が吟味する「ピア・レスポンス」の手法なども取り入れ、推敲能力など、大学生に求められる論理的思考の訓練も行っている。これらの授業を履修している学生は学部留学生が中心であるが、日本語能力が中上級以上(N2合格相当以上)の交換留学生も数名履修している。

2.2. 交換留学生対象日本語科目

交換留学生対象の日本語科目は、日本語能力によるレベル設定をし、初級から中上級まで、それぞれ「話す、聞く、読む、書く」の四技能を学習できるように開講している。2013年度は交換留学生数が増え、2012年度と比べ学習者の日本語レベル差も大きくなったため、それぞれのクラスでは、日本語レベルにかなりの差がある学習者が在籍している。そのため、クラス運営では各授業担当者がレベル差を活かせるタスクを設定するなどさまざまな工夫をし、効果的に日本語学習ができるように努力している。しかし、2013年度後期は、初級から初中級レベルの複数の学習者が、留学当初、授業内容の理解・参加に困難を感じていたため、日本語担当の専任教員が授業外(オフィスアワー)に、可能形、受身形、使役形などの初級後半に学ぶ基本的な文法事項を個別指導する必要があった。

交換留学生対象クラスは、日本語の基礎力の強化とともに、プロジェクトワークや日本人学生とのディスカッションを取り入れている。これらのクラスは、学生間のコミュニケーションを中心とした相互理解を目指したものや、リサーチを基にした日本文化理解など、学生自身が授業を創り出すことを目的とした教室活動が特徴である。

3. 日本語指導および留学生指導に関する課題

2013年度、日本語科目を履修した留学生は、学部留学生が1年生5名、2年生5名、4年生1名、交換留学生は前期11名(フランス2、ドイツ3、韓国3、ブラジル1、ロシア2)、後期15名(フランス2、ドイツ2、スペイン1、韓国5、ブラジル3、メキシコ2)である。このほか、日本語能力の強化が必要であると判断された数名の研究生が聴講している。2012年度の報告でも言及したが、大学院では日本語での講義があるため、研究生の日本語能力は学部留学生相当であることが望ましいが、実際は、学部日本語科目を聴講できるレベルに達していない場合が多い。外国人留学生を研究生として受け入れる際にどのような学修指導が必要となるのか、また学修に必要な日本語能力を有しているかを確認する方法など、研究生受け入れに関する教員へのガイダンス、情報周知については、引き続き課題であると指摘しておきたい。

留学生指導に必要な情報共有については、日本語科目担当、日本語教員課程担当、国際交流室教員、職員がメーリングリストを利用して授業記録を共有している。これにより、留学生の日本語の学習状況だけでなく、彼らの生活状況を把握し、教員と事務員が協力して留学生を指導することができている。一部の授業ではインターネットポートフォリオシステム manaba

を活用しているが、来年度以降、交換留学生の情報共有と学修状況把握のためにこのシステムを導入できないか、現在検討中である。

来年度以降は協定大学の増加に伴い、日本語や日本文化を主専攻としない交換留学生の増加も見込まれるため、現在、国際交流推進委員会日本語受け入れWGが、2014年度後期にスタートする「交換留学生対象受け入れプログラム」を作成中である。このプログラムの整備により、レベルごとのチームティーチングが可能となる。

しかしながら、このプログラムを円滑に運営するためには、受け入れ時の交換留学生の日本語能力チェックや、履修指導から留学終了まで一貫した学修・生活指導システムを構築し、国際交流室が中心となって運営することが重要である。あわせて、受け入れプログラムはレベル別チームティーチングになるため、クラス別のとりまとめ教員が果たさなければならない役割も大きい。2013年度後期の交換留学生受け入れ時には、履修指導が徹底されていなかったため、開講第1～2週にかけて交換留学生全員がすべてのクラスに参加し、履修者が確定しないという混乱があった。来日時期は一般に留学生の学習意欲が最も高く、学習の動機づけの観点から見ても、来日から履修指導までのプロセスは、彼らの留学成果を左右する重要な時期である。クラス決定のためのプレイスメントテストの実施方法や履修指導体制について、本年度の反省も含め、細部まで検討する必要がある。

以上、2013年度の日本語科目の開講状況と留学生への日本語指導をめぐる課題について述べた。来年度の報告では、新しい受け入れプログラムの実施状況について報告したい。